

科目名	開講時期	単位	時間数	担当者
微生物学	1年後期	1	30	(大学講師として23年)
科目のねらい 感染症の原因となる微生物の基本的性質、感染症の症候、治療、予防法などを学ぶ。また、近年の感染症の特徴である、医療関連感染(院内感染)や新興感染症の問題点を学ぶ。				
到達目標 ・病原微生物(細菌・ウイルス・真菌・原虫)の概要と分類について理解する ・感染と発病について理解し、免疫学の重要性について学ぶ ・院内感染対策として消毒・滅菌法について理解する				
DPとの関連 3. 看護の対象となる人々の健康上の課題に対し、科学的根拠に基づく知識・技術を習得し、看護実践ができる。				
授業計画				
回	目標	学習内容	方法	担当
1 2	微生物学の概要および歴史について説明できる	1)微生物の性質 2)微生物と人間 3)微生物学のあゆみ 4)細菌の構造と性質 5)真菌・原虫・ウイルスの性質	講義	
3	微生物が人体に及ぼす影響と生体防御機構、感染予防について説明できる	1)感染と感染症 2)生体の防御機構(自然免疫、獲得免疫) 3)感染源・感染経路からみた感染症 4)感染症の予防(滅菌と消毒)		
7	感染症の検査と診断・治療について説明できる	1)検査・診断 ①病原体を検出する方法 ②生体の反応から診断する方法(抗体検査) 2)治療 ①化学療法 ②各種の化学療法薬		
8 9	感染症の現状と対策について説明できる	1)感染症の変遷 2)感染症の現状と問題点 ①新興・再興感染症 ②院内感染と特徴 3)感染症対策 ①感染症法及び関連法規 ②感染予防対策 ③ワクチンと予防接種		
10	主な病原微生物と感染症について説明できる			
11 12	1. 病原細菌と細菌感染症	1)グラム陽性・陰性球菌 2)グラム陽性・陰性桿菌 3)カンピロバクター 4)抗酸菌と放線菌 5)嫌気性菌 6)スピロヘータ 7)マイコプラズマ 8)リケッチア 9)クラミジア		
13	2. 真菌感染症、原虫感染症	1)深在性真菌症 2)深部皮膚真菌症 3)赤痢アメーバ 4)トリコモナス 5)トキソプラズマ 6)パルジウム		
14 15	3. ウイルスとウイルス感染症	1)DNAウイルス(ボックス・ヘルペス・アデノ・パピローマ) 2)RNAウイルス(インフルエンザ・ムンプス、麻疹、RS ポリオ・ロタ・風疹・日本脳炎・コロナ ノロ・ヒト免疫不全 など) 3)ウイルスの臨床的分類 ①肝炎ウイルス ②腫瘍ウイルス ③プリオン		
受講上の注意 ・解剖生理学を理解したうえでの受講が必要。 ・疾患の理解(原因)→病態生理→治療→看護と関連する為知識を深める		関連科目 病理学 薬理学 治療論 病態論IV		
事前および事後学習 1. 必要な時間：30時間 2. 事前学習：シラバスを参照し、教科書等を読む。 3. 事後学習：講義毎に学習した内容の資料、教科書を確認し振り返る。				
成績評価の方法 筆記試験100%				
教科書・参考書・その他の教材 教科書 1. 系統看護学講座 専門基礎分野 疾病の成り立ちと回復の促進④ 微生物学				

科目名	開講時期	単位	時間数	担当者
薬理学	1年後期	1	30	(薬剤師として49年)
科目のねらい くすりが生体に及ぼす作用と、生体内での吸収・分布・代謝・排泄などを理解する。				
到達目標 1. 薬理作用の基礎知識に基づき、薬物の特徴・作用機序・人体への影響および薬物の管理について理解できる 2. 主な薬物の特徴について理解できる				
DPとの関連 3. 看護の対象となる人々の健康上の課題に対し、科学的根拠に基づく知識・技術を習得し、看護実践ができる。				
授業計画				
回	目標	学習内容	方法	担当
1 2	薬理学に関する基礎的事項を理解できる。	薬物の基礎知識 1) 薬物とは 2) 薬物の種類と管理 3) 薬物動態(投与経路・吸収・分布・代謝と排泄・動態指標) 4) 薬物相互作用 5) 個人差影響因子 6) 薬物使用の有益性と危険性 7) 薬と法律	講義	
3 5 14	各種製剤と処方、各器官・系統別に作用する薬物の作用機序及び副作用について理解できる。 1. 抗感染症薬 2. 抗がん薬 3. 免疫治療薬・抗アレルギー 4. 末梢での神経活動に作用する薬物 5. 中枢神経系に作用する薬物 7. 循環器系に作用する薬物 8. 呼吸器・消化器・生殖器系に作用する薬物 9. 物質代謝に作用する薬物 10. 皮膚科用薬・眼科用薬 11. 救急時使用薬・漢方薬 12. 消毒薬・輸液製剤・輸血剤	1) 抗菌作用のしくみ 2) 抗菌薬の種類と特徴 3) 抗真菌薬・抗ウイルス薬・抗寄生虫薬 1) 抗癌薬の作用と種類、特徴(細胞障害性抗癌薬, 分子標的薬) 2) 抗がん薬の有害事象 3) 薬物耐性 4) 投与計画 1) 免疫抑制薬 2) 免疫増強薬・予防接種薬 3) 抗ヒスタミン薬と抗アレルギー薬 4) 抗炎症薬 5) 関節リウマチ治療薬 1) 自律神経系作用薬 2) 交感神経作用薬 3) 副交感神経作用薬 4) 抗コリン薬 5) 筋弛緩薬・局所麻酔薬 1) 全身麻酔薬 2) 催眠薬・抗不安薬 3) 抗精神病薬 4) 抗うつ薬・気分安定薬 5) パーキンソン治療薬 5) 抗てんかん薬 1) 降圧薬 2) 狭心症治療薬 3) 心不全治療薬 4) 抗不整脈薬 5) 利尿薬 6) 脂質異常症治療薬 7) 血液凝固系・線溶系作用薬 8) 血液に作用する薬物 1) 気管支喘息薬 2) 鎮咳・去痰・呼吸促進薬 2) 消化性潰瘍薬 3) 健胃・消化薬 4) 制吐・下剤・止痢薬 5) 潰瘍性大腸炎・クローン病薬 6) 女性生殖器作用薬 7) 男性生殖器作用薬 8) 泌尿器作用薬 1) 糖尿病薬 2) 甲状腺薬 3) 下垂体ホルモン 4) 骨粗鬆症薬 5) ビタミン剤 1) 皮膚科用薬の種類と特徴 2) 眼科用薬の種類と特徴 1) 救急時使用薬の特徴と種類 2) 急性中毒薬 3) 漢方薬		
15	13. 看護業務に必要な薬の知識	1) 薬の単位 2) 処方箋 3) 添付文書 4) 薬剤の希釈・溶解 4) 薬物療法における看護師の役割		
受講上の注意 ・解剖生理学、生化学を理解したうえでの受講が必要。□ ・解剖生理学→生化学→病態生理→治療→看護と関連する為知識を深める		関連科目 生化学 治療論 診療補助技術II 各領域看護方法論		
事前および事後学習 1. 必要な時間：30時間 2. 事前学習：シラバスを参照し、教科書等を読む。 3. 事後学習：講義毎に学習した内容の資料、教科書を確認し振り返る。				
成績評価の方法 筆記試験100%				
教科書・参考書・その他の教材 教科書 1. 系統看護学講座 専門基礎分野 疾病の成り立ちと回復の促進③ 薬理学				

科目名	開講時期	単位	時間数	担当者
病理学	1年前期	1	15	(大学講師として23年)
科目のねらい 臓器, 組織, 細胞, 生理機能の変化としての病変について学習し, 疾病の成り立ちや症状を理解する。				
到達目標 1. 疾病の概念について理解できる。 2. 疾病の種類と内容について理解できる。 3. 病理学的変化を理解できる。 4. 代表的な症状・症候の出現する機序を理解する。				
DPとの関連 3. 看護の対象となる人々の健康上の課題に対し、科学的根拠に基づく知識・技術を習得し、看護実践ができる。				
授業計画				
回	目標	学習内容	方法	担当
1	1. 疾患理解の基本となる事項について説明できる。	1) 病理学とは 2) 疾病の成り立ち 3) 病気の原因	講義	
2	2. 正常と病気の状態について説明できる	1) 生理と病態生理 2) 病気の要因 3) 回復に影響する要因		
3	3. 循環障害の病態について説明できる	1) 虚血と梗塞 2) 充血とうっ血 3) 浮腫と腹水 4) 出血		
4	4. 細胞・組織の障害の病態を説明できる	1) 細胞の損傷と適応 2) 細胞の死 3) 変形・圧迫による臓器障害		
5	5. 感染症の病態について説明できる	1) 病原体と感染症 2) 感染の成立 3) 治療と予防		
6	6. 腫瘍の病態について説明できる	1) 良性腫瘍と悪性腫瘍 2) 上皮性腫瘍と非上皮性腫瘍 4) がんの進展・転移		
7	7. 先天異常と遺伝子異常について説明できる	1) 奇形 2) 遺伝子異常と染色体異常		
8	8. 老化と死について説明できる	1) 老化 2) 死の定義		
受講上の注意 ・解剖生理学を理解したうえでの受講が必要。□ ・解剖生理学→病態生理学→疾患→治療→看護と関連する為知識をつなげる			関連科目 解剖生理学 I・II 治療論 病態論 I～V	
事前および事後学習 1. 必要な時間：15時間 2. 事前学習：シラバスを参照し、教科書等を読む。 3. 事後学習：講義毎に学習した内容の資料、教科書を確認し振り返る。				
成績評価の方法 筆記試験100%				
教科書・参考書・その他の教材 教科書 1. 系統看護学講座 専門基礎分野 疾病の成り立ちと回復の促進① 病理学 2. 系統看護学講座 専門基礎分野 疾病の成り立ちと回復の促進② 病態生理学				

科目名	開講時期	単位	時間数	担当者
病態論 I (脳神経・骨筋系)	1年後期	1	30	脳神経：(医師として29年) 運動器：(看護師として4年)
科目のねらい				
1. 脳・神経系に障害を持つ人のアセスメントができる基礎的能力を習得する 2. 運動器系に障害をもつ人のアセスメントができる基礎的能力を習得する				
到達目標				
1. 主な脳神経系疾患の病態生理、症状、検査、診断、治療を理解する 2. 主な運動器系疾患の病態生理、症状、検査、診断、治療を理解する				
DPとの関連				
3. 看護の対象となる人々の健康上の課題に対し、科学的根拠に基づく知識・技術を習得し、看護実践ができる。				
授業計画				
回	目標	学習内容	方法	担当
1 ・ 2	脳・神経系障害の主な症状と病態について説明できる	1. 脳・神経障害とは 1) 神経系の役割 2) 症状のメカニズム 3) 特徴的な障害 2. 主な症状と病態生理 1) 意識障害 2) 高次脳機能障害 3) 運動機能障害 4) 感覚機能障害 5) 自律性機能障害 6) 頭蓋内圧亢進 7) 脊髄刺激症状 8) 頭痛 9) めまい	講義	
3 ・ 4	脳、脳神経系の主な検査・診断と治療・処置について説明できる	1. 診断と診察の流れ 2. 検査 1) 神経学的検査 ①意識状態 ②運動系 ③反射系 ④感覚系 ⑤脳神経系 ⑥高次脳機能 2) 画像診断 ①頭部単純X線撮影 ②CT ③MRI ④脳血管撮影 ⑤SPECTとPET ⑥脳槽シチグラフィ ⑦頸動脈エコー 3) 電気生理学的検査 ①誘発・運動誘発電位 ②脳波 ③筋電図 ④神経伝導 4) 脳脊髄液検査・生検 3. 治療・処置 1) 外科的療法 ①開頭術 ②脳血管内治療 ③神経内視鏡術 ④穿刺術 ⑤シャント術 ⑥椎弓切除術・形成術 2) 内科的療法 ①薬物療法・血漿交換療法 ②その他		
5 ・ 6 ・ 7 ・ 8	脳神経系主な疾患、症状、検査、治療、処置について説明できる 1) 脳血管障害 2) 脳腫瘍、頭部外傷 3) 脊髄疾患・末梢神経障害 4) 脱髄・変性疾患、感染症 5) その他	1. クモ膜下出血 2. 脳出血(脳内出血) 3. 脳梗塞 4. もやもや病 5. 一過性脳虚血発作 6. 脳静脈血栓症 7. 高血圧性脳症 1. 脳腫瘍 2. 頭頂骨損傷 3. 局所性脳損傷 1. 水頭症 2. 脳脊髄液減少症 3. 脊髄炎 4. 脊髄損傷 5. ニューロパチー 6. ギラン・バレー症候群 7. 神経痛 1. 多発性硬化症 2. パーキンソン病 3. 脊髄小脳変性症 5. 筋委縮性側索硬化症 6. 脳炎 7. 髄膜炎 8. 脳膿瘍 1. ヤコブ病 2. 破傷風 3. 中毒 4. てんかん 5. 認知症		

<p>1 ・ 2 3 ・ 4</p> <p>運動機能障害の主な症状と病態について説明できる</p> <p>運動器機能障害の検査・診断と治療・処置について説明できる</p>	<p>1. 疼痛 2. 形態の異常(奇形と変形) 3. 関節運動の異常 4. 神経の障害(運動麻痺、感覚障害) 5. 跛行 6. 筋肉の障害</p> <p>1. 診断と診察の流れ 問診、視診・触診、神経診察</p> <p>2. 検査 1) 画像検査 ①X線 ②MRI ③超音波 ④造影検査 ⑤シンチグラフィ ⑥骨密度測定 2) 筋電図 3) 関節鏡 4) その他</p> <p>3. 治療・処置 1) 保存療法(非観血的治療) ①ギプス包帯法 ②副子法 ③包帯・三角巾・テーピング ④牽引 ⑤薬物 ⑥関節注射 ⑦神経ブロック 2) 理学療法・作業療法 3) 手術療法 ①骨折・脱臼 ②関節 ③脊椎・脊髄 ④腱・靭帯 など 4) 義肢・装具</p>	<p>1) 骨折 2) 脱臼 3) 捻挫・打撲 4) 神経損傷(脊髄損傷) 4) 筋・腱・靭帯損傷</p> <p>1) 先天性疾患(筋性斜頸、股関節形成不全、内反足など) 2) 関節リウマチと類縁疾患(痛風、脊椎関節炎など) 3) 関節の変性疾患:変形性関節症(股関節・膝関節)</p> <p>1) 良性腫瘍 2) 悪性腫瘍 3) 悪性軟部腫瘍</p> <p>1) 骨粗鬆症 2) くる病・骨軟化症</p> <p>1) ばね指 2) 脳性麻痺 3) 筋ジストロフィー</p> <p>1) 頸肩腕症候群 2) 椎間板ヘルニア 3) ペルテス など</p> <p>ロコモティブシンドローム 廃用症候群 など</p>	<p>講義</p>	
<p>受講上の注意</p> <ul style="list-style-type: none"> 解剖生理学を理解したうえでの受講が必要。□ 解剖・生理→疾患の理解→看護と関連するため既習の知識を想起し、積極的な姿勢で臨む。 		<p>関連科目</p> <p>解剖生理学 I 病理学 治療論</p>		
<p>事前および事後学習</p> <ol style="list-style-type: none"> 必要な時間: 30時間 事前学習: 解剖生理学 I で既習した内容の理解が必須。予習しておくこと。 事後学習: 講義毎に学習した内容の資料、教科書を確認し振り返る。 				
<p>成績評価の方法</p> <p>筆記試験100%</p>				
<p>教科書・参考書・その他の教材</p> <p>教科書</p> <ol style="list-style-type: none"> 専門基礎分野 解剖生理学 人体の構造と機能① 専門分野Ⅱ 脳・神経 成人看護学⑦ 専門分野Ⅱ 運動器 成人看護学⑩ 				

科目名	開講時期	単位	時間数	担当者
病態論Ⅱ (呼吸器・循環器系)	1年後期	1	30	呼吸器：(医師として47年) 循環器：(医師として39年)
科目のねらい				
1. 呼吸器に障害を持つ人のアセスメントができる基礎的能力を習得する 2. 循環器に障害をもつ人のアセスメントができる基礎的能力を習得する				
到達目標				
1. 主な呼吸器系疾患の病態生理、症状、検査、診断、治療を理解する 2. 主な循環器系疾患の病態生理、症状、検査、診断、治療を理解する				
DPとの関連				
3. 看護の対象となる人々の健康上の課題に対し、科学的根拠に基づく知識・技術を習得し、看護実践ができる。				
授業計画				
回	目標	学習内容	方法	担当
1	呼吸機能障害の主な症状と病態生理について説明できる	1. 自覚症状 1) 咳嗽 2) 喀痰 3) 血痰・喀血 4) 胸痛 5) 呼吸困難 2. 他覚症状 1) チアノーゼ 2) ばち指 3) 発熱 4) 呼吸の異常 5) 声の異常 6) いびき 7) 意識障害	講義	
2	呼吸器系の主な検査、診断、治療、処置について説明できる	1. 検査と診断の流れ 1) 問診 2) 身体所見(視診・触診、打診、聴診)	講義	
3		2. 検査 1) 血液 2) 喀痰 3) 咽頭・鼻腔ぬぐい液 4) 胸水 5) 画像(単純X線、CT、超音波、MRI、PET) 6) 内視鏡 7) 生検 8) 呼吸機能		
4		3. 治療・処置 1) 吸入療法 2) 酸素療法 3) 人工呼吸療法 4) 呼吸リハビリテーション 5) 気道確保 6) 胸部ドレナージ 7) 手術療法		
5	呼吸器系の主な疾患の、症状、検査、治療、処置について説明できる	1) かぜと急性気管支炎 2) インフルエンザ 3) 肺炎 4) 結核		
6	2. 間質性肺疾患	1) 間質性肺炎		
7	3. 気道疾患	1) 気管支喘息 2) 気管支拡張症 3) 慢性閉塞性肺疾患	講義	
8	4. 肺循環疾患	1) 肺血栓塞栓症 2) 肺高血圧症		
9	5. 呼吸不全、呼吸調節関連疾患	1) 急性・慢性呼吸不全 2) 過換気症候群 3) 睡眠時無呼吸症候群		
10	6. 肺腫瘍	1) 両性腫瘍 2) 悪性腫瘍(原発性肺がん・転移性肺腫瘍)		
11	7. 胸膜・縦隔・横隔膜疾患	1) 気胸 2) 縦隔腫瘍 3) 横隔膜ヘルニア		
1	循環機能障害の主な症状と病態生理について説明できる	1) 胸痛 2) 動悸 3) 呼吸困難 4) 浮腫 5) チアノーゼ 6) めまい・失神 7) 四肢の疼痛 8) ショック	講義	
2	循環器系の主な検査・診断・治療・処置について説明できる	1. 診察と診断の流れ 1) 問診・医療面接 2) 視診 3) 触診 4) 聴診	講義	
3		2. 検査 1) 心電図 2) 胸部X線 3) 心エコー 4) 脈波 5) 心臓カテーテル法(アブレーション) 6) 血行動態モニタリング 7) 心臓核医学 8) CT 9) MRI		
4		3. 治療・処置 1) 内科的治療 ①薬物療法 ②経皮的冠状動脈インターベンション ③ペースメーカー治療		
5		2) 外科的治療 ①心臓手術 ②冠状動脈バイパス術 ③弁膜症手術 ④大血管再建術 ⑤血栓除去術 3) 補助循環装置 ①大動脈内バルーンポンピング ②経皮的心肺補助 ③補助人工心臓		

5 (8	循環器系の主な疾患の症状、 検査、治療、処置について説 明できる 1. 虚血性心疾患 2. 心不全 3. 血圧異常、不整脈 4. 弁膜症、心筋疾患、心膜炎 5. 先天性心疾患、動脈系疾患 静脈系疾患	1)狭心症 2)急性心筋梗塞 1)急性心不全 2)慢性心不全 1)本態性高血圧 2)二次性高血圧 3)本態性低血圧 4)除脈性不整脈 5)頻脈性不整脈 1)僧房弁・大動脈弁狭窄症、不全症 2)心タンポナーゼ 3)心筋症 1)動脈管開存症 2)心室・心房中隔欠損症 3)ファロ-四徴症 4)大動脈瘤 5)大動脈解離 6)閉塞性動脈疾患 7)静脈炎 8)深部静脈血栓症 9)静脈瘤 10)肺塞栓症	講義	
受講上の注意 ・解剖生理学を理解したうえでの受講が必要。□ ・解剖・生理→疾患の理解→看護と関連するため既習の 知識を想起し、積極的な姿勢で臨む。		関連科目 解剖生理学 I 病理学 治療論		
事前および事後学習 1. 必要な時間：30時間 2. 事前学習：解剖生理学 I で既習した内容の理解が必須。予習しておくこと。 3. 事後学習：講義毎に学習した内容の資料、教科書を確認し振り返る。				
成績評価の方法 筆記試験100%				
教科書・参考書・その他の教材 教科書 1. 専門基礎分野 解剖生理学 人体の構造と機能① 2. 専門分野Ⅱ 呼吸器 成人看護学② 3. 専門分野Ⅱ 循環器 成人看護学③				

科目名	開講時期	単位	時間数	担当者
病態論Ⅲ (消化器・内分泌系)	1年後期	1	30	消化器：(医師として42年) 内分泌/代謝：(医師として6年)
科目のねらい				
1. 消化器に障害を持つ人のアセスメントができる基礎的能力を習得する 2. 内分泌/代謝系に障害をもつ人のアセスメントができる基礎的能力を習得する				
到達目標				
1. 主な消化器系疾患の病態生理、症状、検査、診断、治療を理解する 2. 主な内分泌/代謝性疾患の病態生理、症状、検査、診断、治療を理解する				
DPとの関連				
3. 看護の対象となる人々の健康上の課題に対し、科学的根拠に基づく知識・技術を習得し、看護実践ができる。				
授業計画				
回	目標	学習内容	方法	担当
1 2 3 4	消化機能障害の主な症状と病態生理について説明できる 消化器系の主な症状、検査、診断、治療、処置について説明できる	1) 嚥下困難 2) おくび・胸やけ 3) 嘔気・嘔吐 4) 腹痛 5) 吐血・下血 6) 下痢・便秘 7) 腹部膨満 8) 食欲不振と体重減少 9) 腹水 10) 黄疸 11) 意識障害 1. 検査と診断の流れ 1) 問診 2) 聴診 3) 打診 4) 触診 5) 直腸指診 2. 検査 1) 糞便 2) 肝機能 3) 膵外分泌 4) 超音波 5) 内視鏡 6) 肝生検 7) 放射線検査 ①腹部単純X線、②消化管単純X線(透視) ③胆道、膵管検査(MRCP、DIC、PTC、ERCP) 8) CT 9) MRI 10) シンチグラフィ 11) PET 3. 治療・処置 1) 薬物療法 2) 栄養・食事療法 3) 手術療法 4) 放射線療法	講義	
4 5 8	消化器系の主な疾患、症状、検査、治療、処置について説明できる 1. 食道の疾患 2. 胃・十二指腸疾患 3. 腸および腹膜疾患 4. 肝臓・胆嚢の疾患 5. 膵臓疾患	1) 食道がん 2) 胃食道逆流症 1) 胃炎 2) 胃・十二指腸潰瘍 3) 胃がん 1) 過敏性腸症候群 2) 腸炎 3) 腹膜炎 4) 虫垂炎・ヘルニア 5) 腸閉塞 6) 消化管憩室 7) 腸管ポリープ 8) 大腸がん 9) 肛門疾患 1) 肝炎 2) 肝硬変症 3) 門脈圧亢進症 4) 肝不全 5) 肝臓がん 6) 胆石症 7) 胆嚢炎・胆管炎 8) 胆管がん 1) 膵炎 2) 膵臓がん 3) 急性腹症		
9 10	内分泌/代謝機能障害の主な症状と病態生理について説明できる	1) 体重変化・身長異常 2) 容貌の変化 3) 神経・筋症状 4) 循環器症状 5) 消化器症状 など	講義	
11	内分泌/代謝系の検査について説明できる	1) 内分泌疾患の検査(ホルモン検査など) 2) 代謝疾患の検査(糖尿病など) 3) 脂質異常		
12 15	内分泌/代謝系の主な疾患、症状、検査、治療、処置について説明できる 1. 内分泌疾患 2. 代謝疾患	①視床下部-下垂体疾患 ②甲状腺/副甲状腺疾患 ③副腎疾患 ①糖尿病および合併症 ②脂質異常症 ③肥満症とメタリックシンドローム ④尿酸代謝異常		
受講上の注意		関連科目		
<ul style="list-style-type: none"> 解剖生理学を理解したうえでの受講が必要。□ 解剖・生理→疾患の理解→看護と関連するため既習の知識を想起し、積極的な姿勢で臨む。 		解剖生理学 I □ 病理学 治療論		
事前および事後学習				
1. 必要な時間：30時間 2. 事前学習：解剖生理学 I で既習した内容の理解が必須。予習しておくこと。 3. 事後学習：講義毎に学習した内容の資料、教科書を確認し振り返る。				
成績評価の方法				
筆記試験100%				

教科書・参考書・その他の教材
教科書

1. 専門基礎分野 解剖生理学 人体の構造と機能①
2. 専門分野Ⅱ 消化器 成人看護学⑤
3. 専門分野Ⅱ 内分泌・代謝 成人看護学⑥

科目名	開講時期	単位	時間数	担当者
病態論Ⅳ (血液造血器・免アレ感染)	2年前期	1	30	血液・造血器：(医師として18年) ：板村 英和(医師として15年) 免疫・アレ・感染症：(医師として47年)
科目のねらい 1. 血液・造血器に障害を持つ人のアセスメントができる基礎的能力を習得する 2. 自己免疫系に障害をもつ人のアセスメントができる基礎的能力を習得する 3. 感染症のもつ人のアセスメントができる基礎的知識を習得する				
到達目標 1. 主な血液・造血器系疾患の病態生理、症状、検査、診断、治療を理解する 2. 主な自己免疫疾患の病態生理、症状、検査、診断、治療を理解する 3. 感染症の概要と検査、診断、治療について理解する				
DPとの関連 3. 看護の対象となる人々の健康上の課題に対し、科学的根拠に基づく知識・技術を習得し、看護実践ができる。				
授業計画				
回	目標	学習内容	方法	担当
1	血液の生理と造血のしくみについて説明できる	1) 血液の成分と機能 2) 造血のしくみ	講義	
2	血液・造血器障害の主な症状と検査、診断、治療、処置について説明できる	1) 病歴聴取と身体所見 ①貧血 ②発熱 ③出血傾向 2) 検査 ①末梢血検査 ②骨髓穿刺・骨髓生検 ③出血傾向検査 ④リンパ節生検 ⑤染色体検査 ⑥遺伝子検査 3) 症候と病態生理 ①貧血 ②白血球増加・減少 ③脾腫 ④リンパ節腫脹 ⑤出血性素因	講義	
3 6	血液・造血器障害の主な疾患、症状、検査、治療、処置について説明できる 1. 赤血球の異常 2. 白血球の異常 3. 造血器腫瘍 4. 出血性疾患	1) 鉄欠乏性貧血 2) 再生不良性貧血 3) 溶血性貧血 1) 伝染性単核救症 1) 急性白血病 2) 慢性骨髄性白血病 3) 慢性悪性リンパ性白血病 4) 成人T細胞白血病 5) 悪性リンパ腫 6) 骨髄腫 1) アルギン性紫斑病 2) 特発性血小板減少性紫斑病 3) 血友病 4) 播種性血管内凝固症候群(DIC)	講義	
7	1. 免疫のしくみ、主な検査と治療について述べるができる	1) 免疫のしくみとアレルギー ①免疫反応と疾患 ②免疫担当細胞と伝達物質 ③アレルギーのしくみ	講義	
8	2. 免疫・アレルギー疾患の症状、検査、治療について説明できる	1) 診断の流れ ①問診 ②診察・検査 2) 検査 ①IgE ②白血球 ③LST ④皮膚 その他 3) 治療 ①生活習慣改善 ②薬物療法 ③免疫療法	講義	
9 10	3. 主な自己免疫疾患の症状、病態、検査、治療、処置について説明できる	1) 膠原病(SLE・関節リウマチ) 2) 気管支喘息 3) アナフェラキシー	講義	
11	1. 感染症とはについて説明できる	1) 感染症の原因 2) 感染が成立する条件 3) 感染症の病態生理 4) 感染症の症状	講義	
12	2. 感染症の検査・診断について説明できる	1) 感染症診断の原則 2) 検査・診断・治療の流れ 3) 検査の実際	講義	
14	3. 感染症の治療について説明できる	1) 感染症治療の原則 2) 抗菌薬 3) 抗真菌薬 4) 抗ウイルス薬 5) 一次予防と二次予防	講義	
15	4. 主な感染症疾患の症状、診断、治療について説明できる	1) 発熱・不明熱 2) 上気道感染症 3) 下気道感染症 4) 心血管系感染症 5) 消化管感染症 6) 尿路感染症 7) 性感染症 8) 皮膚軟部組織感染症 9) 眼の感染症 10) 中枢神経感染症 11) 免疫不全に伴う感染症 12) 菌・敗血症 13) 麻疹・風疹・水痘 14) 真菌感染症 15) HIV感染症、日和見感染症 16) 多剤耐性菌感染症 など	講義	
受講上の注意 ・解剖生理学を理解したうえでの受講が必要。□ ・解剖・生理→疾患の理解→看護と関連するため既習の知識を想起し、積極的な姿勢で臨む。			関連科目 解剖生理学Ⅰ・Ⅱ 微生物学 病理学 治療論	
事前および事後学習 1. 必要な時間：30時間 2. 事前学習：解剖生理学Ⅰで既習した内容の理解が必須。予習しておくこと。 3. 事後学習：講義毎に学習した内容の資料、教科書を確認し振り返る。				
成績評価の方法				

筆記試験100%

教科書・参考書・その他の教材

教科書

1. 専門分野Ⅱ 血液・造血器 成人看護学④
2. 専門分野Ⅱ アレルギー 膠原病 感染症 成人看護学⑩

科目名	開講時期	単位	時間数	担当者
病態論V (腎泌尿器・女性生殖器・感覚器)	2年前期	1	30	腎泌尿器：(医師として38年) 女性生殖器：(医師として14年) 感覚器：(医師として29年)
科目のねらい 1. 腎・泌尿器に障害を持つ人のアセスメントができる基礎的能力を習得する 2. 女性生殖器に障害をもつ人のアセスメントができる基礎的能力を習得する 3. 感覚器に障害を持つ人のアセスメントができる基礎的能力を習得する				
到達目標 1. 主な腎・泌尿器疾患の病態生理、症状、検査、診断、治療を理解する 2. 主な女性生殖器疾患の病態生理、症状、検査、診断、治療を理解する 3. 主な感覚器疾患の病態生理、症状、検査、診断、治療を理解する				
DPとの関連 3. 看護の対象となる人々の健康上の課題に対し、科学的根拠に基づく知識・技術を習得し、看護実践ができる。				
授業計画				
回	目標	学習内容	方法	担当
1 2 3	腎・泌尿器障害の主な症状と病態生理について説明できる 腎・泌尿器疾患の検査・診断・治療・処置について説明できる	1)尿の異常 2)排尿関連症状 3)浮腫 4)脱水 5)循環器系の異常 6)尿毒症 7)疼痛 8)腫脹・腫瘍 1. 診察 1)病歴聴取 2)診察法(視診・聴診) 2. 検査 1)尿検査 2)分泌物検査 3)腎機能検査 4)画像検査(①X線 ②超音波 ③核医学 ④CT ⑤MRI) 5)経尿道的操作および内視鏡検査 6)尿流動検査 3. 治療と処置 1)内視鏡の治療 2)尿路感染症治療 3)手術療法 4)放射線療法 5)薬物・免疫療法 6)透析療法(血液透析、腹膜透析) 7)腎移植	講義	
4 5 8	腎・泌尿器障害の主な疾患、症状、検査、治療、処置について説明できる 1. 腎不全とAKI・CKD 2. 糸球体腎炎 3. 全身性疾患による腎障害 4. 尿路・性器の感染症 5. 尿路結石症 6. 尿路・性器の腫瘍 7. 排尿障害	1)急性・慢性腎不全 2)急性腎障害 3)慢性腎臓病 4) 1)急性糸球体腎炎 2)慢性糸球体腎炎 1)糖尿病性腎症 2)膠原病等による腎障害 3)その他 1)腎盂腎炎 2)膀胱・尿道炎 3)性感染症 1)腎結石 2)尿管・膀胱・尿道結石 1)腎実質腫瘍 2)腎盂・尿管がん(膀胱・尿道、前立腺) 1)過活動膀胱 2)腹圧性尿失禁		
9 11	女性生殖器疾患の主な症状と病態生理について説明できる 女性生殖疾患の主な診察、検査、治療、処置について説明できる 女性生殖器の主な疾患の症状、検査、治療、処置について説明できる	1)出血 2)帯下 3)疼痛 4)発熱 5)他 1)診察・検査 ①診察・治療器具 ②理学的検査 ③病理検査 ④画像検査 ⑤内視鏡検査 2)治療・処置 ①ダグラス窩穿刺 ②レーザー治療 ③薬物療法 ④手術療法 1)子宮の疾患 ①子宮筋腫 ②子宮がん ③子宮内膜症 2)卵管・卵巣の疾患 ①卵管がん ②卵巣腫瘍 3)性感染症 4)乳房の疾患 ①乳がん ②その他	講義	
12 15	主な感覚器疾患の症状、病態、検査、治療、処置を説明できる 1. 眼科疾患 2. 耳鼻・咽喉疾患 3. 皮膚疾患	1)白内障 2)緑内障 3)角膜・結膜炎 4)網膜症・剥離 1)副鼻腔炎 2)メニエル病 3)中耳炎 4)突発性難聴 5)咽頭・喉頭がん 6)上顎がん 1)熱傷 2)湿疹 3)帯状疱疹 4)疥癬 5)蜂窩織炎 6)アトピー性皮膚炎	講義	
受講上の注意 ・解剖生理学を理解したうえでの受講が必要。□ ・解剖・生理→疾患の理解→看護と関連するため既習の知識を想起し、積極的な姿勢で臨む。		関連科目 解剖生理学 I 病理学 治療論		
事前および事後学習 1. 必要な時間：30時間 2. 事前学習：解剖生理学 I で既習した内容の理解が必須。予習しておくこと。 3. 事後学習：講義毎に学習した内容の資料、教科書を確認し振り返る。				
成績評価の方法 筆記試験100%				

教科書・参考書・その他の教材

教科書

1. 専門基礎分野 解剖生理学 人体の構造と機能①
2. 専門分野Ⅱ 腎・泌尿器 成人看護学⑧ 女性生殖器 成人看護学⑨
3. 専門分野Ⅱ 皮膚 成人看護学⑫ 眼 成人看護学⑬ 耳鼻咽喉 成人看護学⑭

科目名	開講時期	単位	時間数	担当者
治療論 (手術・救急・放治・リハビリテーション)	1年後期	1	30	手術療法：(医師として30年) 救急法：(医師として42年) 放射線治療：(医師として47年) リハビリテーション療法：(理学療法士として14年)
科目のねらい 様々な健康の段階で行われる救急法、外科的治療、放射線療法、リハビリテーション療法について理解し、治療を受ける患者の看護に必要な基礎的知識を習得する。				
到達目標 1. 手術療法における麻酔法、生体反応、術後合併症について理解する。 2. 救急・救命時における治療と対処について理解する。 3. 放射線の人体への影響と検査・治療法について理解する。 4. リハビリテーション療法の概念と技術について理解する。				
DPとの関連 3. 看護の対象となる人々の健康上の課題に対し、科学的根拠に基づく知識・技術を習得し、看護実践ができる。				
授業計画				
回	目標	学習内容	方法	担当
1	1. 手術療法に伴う麻酔の影響と生体の反応について述べる こと 4 5 8	1) 手術療法とは 2) 手術侵襲と生体反応、術後合併症 3) サイトカインによる生体調節機構 4) 手術侵襲の評価 5) 創傷治療 ①創傷治癒過程 ②創傷治癒に影響する因子 ③創傷管理法 ④創傷治癒の促進 6) 麻酔 ①麻酔とは ②麻酔の種類 ③術前・術中・術後の管理	講義	
4				
5				
8				
9	2. 生命危機時における、救命・救急の基礎的知識と対処が理解できる 9 11 12	1) 救急状態にある対象の理解 ①救急患者の特徴と観察、アセスメント ②救急患者家族の特徴 2) 主要病態に対する救急処置 ①心肺停止 ②意識障害 ③呼吸障害 ④ショック ⑤熱中症 ⑥外傷 ⑦熱傷 ⑧中毒 ⑨溺水 3) 救命・救急処置 ①一次救命処置 (BLS) ②トリアージ ③二次救命処置 (ALS)	講義	演習
11				
12	3. 放射線の基礎知識と放射線による検査、治療について説明できる 11 12	1) 医療における放射線の役割 ①放射線とは ②放射線の性質(画像診断と放射線治療) ③人体への影響 ④安全性への配慮と確保 2) 放射線治療 ①悪性腫瘍の放射線感受性 ②放射線治療の役割と治療の原則 ③治療に必要な放射線量と照射回数 ④併用療法	講義	演習
15				
15	4. リハビリテーションの概念とリハビリテーション技術の基本を説明できる 11 12	1) リハビリテーションの基礎 ①リハビリテーションの概念 ②リハビリテーションの展開 ③機能障害の評価 2) リハビリテーションの実際 ①運動麻痺と機能訓練 ②呼吸器疾患とリハビリテーション ③心疾患とリハビリテーション ④言語機能回復のリハビリテーション	講義	演習
受講上の注意		関連科目		
それぞれの治療により生じる身体内部の変化や患者理解など、看護の展開に必要な基本的知識であるため、各疾患、治療、看護とつなげられるように積極的に学習する		解剖生理学Ⅰ・Ⅱ 病態論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ 成人臨床看護論 成人看護学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		
事前および事後学習				
1. 必要な時間：30時間 2. 事前学習：解剖生理学Ⅰ・Ⅱ、病態論Ⅰ～Ⅴで既習した内容の理解が必須。予習しておくこと。 3. 事後学習：講義毎に学習した内容の資料、教科書を確認し振り返る。				
成績評価の方法				
筆記試験100%				
教科書・参考書・その他の教材				
教科書				
1. 系統看護学講座 別巻 臨床外科看護総論 2. 系統看護学講座 別巻 救急看護学 3. 系統看護学講座 別巻 臨床放射線医学 4. 系統看護学講座 別巻 リハビリテーション看護				

科目名	開講時期	単位	時間数	担当者
口腔健康科学論 (口腔ケア・嚥下障害)	1年後期	1	15	(大学教授として1年) (大学教授として8年) (大学教授として8年) (言語聴覚士として11年)
科目のねらい 科学的根拠をもった口腔ケアの実践につなげるために、口腔と全身の健康・疾患について理解する				
到達目標 1. 歯と口腔に関する構造と機能について基本的知識を理解できる 2. 歯・口腔の疾患に関する理解を深め、全身疾患との関連性を理解できる				
DPとの関連 DP1. 看護の対象となる人々の健康上の課題に対し、科学的根拠に基づく知識、技術を習得し看護実践ができる				
授業計画				
回	目標	学習内容	方法	担当
1	1. 歯・口腔・口腔周囲の構造と機能について説明できる	1. 口腔：歯、歯・周囲組織、口蓋、舌、口底 2. 口腔周囲：口唇、頬部、顎下部 3. 顎骨・顎関節：上顎骨、下顎骨、顎関節 4. 口腔顎顔面の筋：咀嚼筋、舌骨上筋群、舌筋、顔面筋 5. 咀嚼の基礎 6. 唾液腺と唾液の働き：耳下腺、顎下腺、舌下腺、小唾液腺 7. 口腔微生物の役割と病原性	講義	
2	2. 歯・口腔疾患に伴う主な症状とその発生機序及び病態生理が説明できる	1. 口腔症状 痛み、腫脹、出血、歯の欠損、口臭の原因と分類、口腔乾燥 2. 口腔機能障害 呼吸障害、開口障害、	講義	
3 4 5	3. 咀嚼機能、嚥下機能の関わる構造と機能及びその機能障害を説明できる。	1. 咽頭と喉頭 2. 嚥下機能 3. 口腔機能障害 咀嚼障害、嚥下障害、味覚障害	講義	
6	歯・口腔疾患に伴う検査・治療・処置について説明できる	1. 検査 咀嚼機能検査、嚥下機能検査、口腔乾燥検査、画像検査 2. 治療・処置 保存治療、外科治療、補綴治療	講義	
7	歯・口腔疾患を理解する	1. 歯の異常と疾患：齲蝕、歯髄疾患 2. 口腔領域の炎症：歯肉炎、慢性歯周炎 3. 口腔粘膜疾患：アフタ性潰瘍、ペーチェット病、口唇ヘルペス 4. 腫瘍：良性腫瘍、悪性腫瘍 5. 顎関節の疾患：顎関節症	講義	
8	全身疾患と口腔疾患の関連性について説明できる	1. 誤嚥性肺炎と口腔ケア 2. 糖尿病と口腔ケア 3. 心筋梗塞、脳梗塞と口腔ケア 4. 心筋梗塞、狭心症と口腔ケア 5. 早産と口腔ケア	講義	
受講上の注意 ・プレテスト、ポストテストを実施し、成績評価に反映する。 ・能動的な講義形式である。積極的な姿勢で講義に臨むこと。			関連科目 生活援助技術Ⅲ 成人看護学（脳神経） 成人看護学（耳鼻咽喉） 老年看護学 在宅看護論	
事前および事後学習 1. 必要な時間：30時間 2. 事前学習：生活援助技術Ⅲで既習した内容である。予習しておくこと。 3. 事後学習：				
成績評価の方法 筆記試験100%				
教科書・参考書・その他の教材 教科書 1. 成人看護学（歯・口腔） 2. 基礎看護学技術Ⅱ				